

コラムを発端に思考を表現する

川合 萌

一 はじめに

松山高校に赴任してすぐに、「これまでの自分自身の勉強や経験がほとんどと言って良いほど生かすことができない」そんな現状に直面し、愕然としました。漢字が読めない。言葉の意味が分からない。次の時間には前の時間の内容をほとんど忘れる……これまで、所謂進学校で勤務させていただいていた稿者にとつては、分からないことが分かりませんでした。高校だから小中学校で学んだであろうという稿者の中の常識が全く通用しなかったのです。もっと生徒にあったレベルの授業をしなければと必死になっていました。

そのような状況の中で、様々なご縁をいただき、山陽新聞社のご協力のもと、「コラムを発端に思考を表現する」というテーマで授業を行いました。

本稿は山陽新聞社と吉備ケーブルテレビの取材を受けさせていただいた授業であり、ノートルダム清心女子大学の「三時の会」での発表を加筆修正したものです。

二 学校紹介

岡山県高梁市立松山高等学校は、備北地区唯一の夜間定時制高校である。生徒の多くが何かしらの問題を抱えており、現在は十五〜四十七歳の二十一名が在籍している。全四学年である。「働きつつ学ぶ」をモットーに、昼間は仕事をし、夜は学校で勉強をしている。本校へ来るまではほとんど学校に行っていないような生徒が多く（不登校や保健室登校、特別支援学級など）、平成二十五年度の全国学力テスト小学校第六学年A問題を全校生徒対象に実施したところ（今年度最初の授業で実施）、正答率が約五十五%であり、学力は極めて低いと認めざるを得ない。（得点は発表者が設定したので、正答率の数字は目安）一方では、定時制高校の不利な点を自覚し、本気で学び直しを求め、とても素直で意欲的な生徒が多い。

三 生徒観と目的

今回の対象となったのは現在の第三学年である。授業当時は第二学年で在籍生徒五名を対象に国語総合を行っていた。この学年は引きこもりや不登校を経験した生徒ばかりである。よって、義務教育をほとんど受けていない生徒もいることから、学力としては全校で最も低い。(前述した今年度当初に行った全国学力テストの正答率は約三十五パーセント)識字能力が著しく低い生徒、すぐに諦めて自力では問題に向き合えない生徒など、ペーパーテストをすると授業での反応と全く比例しない結果になってしまう生徒が多い。しかし、クラス全体の雰囲気は良く、おしゃべりが好きな生徒が多いことから、授業も対話形式で進めることができ、比較的真面目に取り組むことができる。学校の大切さを認識する生徒が多いことから、一生懸命に授業を受けようとする態度が見られる。

「読むこと」に関しては、文章をイメージしながら読みへと落とす、つまり読解への手掛かりとして具体例を使用することに大きな課題を抱えていると感じていた。授業で扱う文章の内容が分かるかを問うても、「言葉の意味は何となく分かるけど、何が言いたいのかは分からない」と答えることが多かった。また、読む時に何に注意しながら読んでいるかを尋ねても、「特にない」と全員が答えた。「書くこと」に関しては、書き出しが定まらず、何時間経ってもなかなか前に進まないことが多々ある。また、文章を長くくだらだと書くことはできるが、書いているうちに何が言いたいのか自分自身が分か

らなくなり、まとまらなくなるということが頻発していた。何を書けばいいのか、何を書きたいのかというイメージが湧かず、苦勞している様子が見受けられることが多かった。

このような事象は全て、具体例に対するメタ認知の欠如が原因の一つとしてあるのではないかと感じた。よって、具体例とは何か、なぜ具体例が必要なのか、このことの解決が生徒にとつての国語力の基礎として、今後の成長を支えてくれるのではないかと期待した。そこで、今回の単元では、新聞のコラムを参考に「具体」の効果を理解することを目的とした。但し、ここで言う「具体」とは主に事実と意見という対義における事実に当たるものに焦点を置いている。

四 教材観

「具体」の効果を理解するために今回用いたのは、新聞のコラムである。新聞のコラムを教材としたのは、以下の五点の理由からである。

- ①コラムの書き写しを何度も行い、生徒にとつては馴染みのある文章であること。
- ②段落構成が分かりやすいこと。
- ③短い文章であるため、内容を把握するのに時間がかからないこと。
- ④具体例が明確に記述されていること。
- ⑤評論文のようにきちんとした論理構成を求められず自由に書

けること。

これらの利点から本教材を使用することにした。また、本単元でモデルとして使用した山陽新聞の平成二十五年一月六日のコラムは、冬休み明けで正月の記憶も新しい生徒にとっては、とても旬な話題であった。それだけではなく、新聞のコラムを使って「具体」の効果に気付き、その効果を自ら生かして文章を書いてみることで、「具体」に対する理解を深めることを目指せる教材として使用できると考えた。

五 授業の実際

授業は、①イメージする②効果を知る③使ってみるという三段階で行った。

(一) イメージする

ここでは、イメージすることによって、絵としてイメージしやすい「具体」とそうでないものの区別化を試みた。

まず、単元の最初にモデルとなるコラムの書き写しを行うことで、文章の内容をなんとなく分かるという程度に読んだ状態にし、記述の中でイメージできるもの（「具体」とそうでないものに気づかせるために、「イメージ読み」を行った。「イメージ読み」とは、文章に書かれた内容をイメージしながら読むことである。今回はイメージをより共有するために、挿絵を留意し、挿絵と文章を意味段落ごとに示しながら読む方法を行った。

この方法は、桂（2011）の「イメージ型」の中にある「資料提示読み」を参考にしたものである。桂氏の実践は、教科書に本文と一緒に掲載されている資料を使って行う音読であり、「文章と資料との対応をつかませることは、内容を理解させていくのにとっても有効です。」と述べている。

そこで、コラムには資料が同時に掲載されていないため、稿者が行った授業では、稿者が挿絵を留意し、その順番を入れ替え、挿絵と本文が対応しない状態で、挿絵を見せながら範読を行った。生徒が読まず、範読を行うのは、挿絵に注目させるためである。

「絵を留意してきたから、顔を上げて絵を見ながら内容を復習しよう」と呼びかけて範読すると、挿絵が順番通りでないことに気がついた生徒がすぐに反応を示した。そこで、生徒の指摘から、正しい順番に挿絵を並び替える作業を行った。この時、その根拠を本文から見つけることで、絵になっている部分を本文から探し出す、つまり具体例となっている部分の抜き出しを行った。このことから、生徒は自然に絵にできる部分とそうでない部分があることに気づいた。「イメージ」するのまともとして、絵にできる部分を「具体」と呼ぶことを説明することにより、生徒の中で「具体」とは絵や映像にできるものという認知をし始めた。

(二) 効果を知る

「イメージ読み」で「具体」を認知し始めたところで、次に「つぶやき読み」を通して、なぜ「具体」が必要なのかという、「具体」の効果について考える学習を行った。

「つぶやき読み」とは、対象となる文章の全ての文に合いの手を入れながら読む方法であり、文章を論理的に理解するために用いた手法である。すぐに対話形式では対応できない生徒が多いため、「プリントにツイッター感覚でコメントを一言ずつ書こう」と生徒に呼びかけ、プリントに書く時間をまずは設け、その後発表を行った。この「つぶやき読み」は二回行った。

一回目はコラム全文に対するつぶやき、二回目は「具体」を全て削除した文章、つまり要約したものにつぶやきを行った。一回目のつぶやきは「楽しそう！何書いてもえん？」と楽しそうに書き込んでいた。しかし、二回目の要約の文章になると極端に反応が薄くなり、全ての生徒がほとんど何もつぶやけないという状態になった。毎回提出する授業の「振り返りシート」に、一回目と二回目のつぶやきについて、全生徒が「二回目の方がつぶやきにくかった」という内容が書かれていた。

この「イメージ読み」と「つぶやき読み」のまとめとして、これらの実践で受けた印象を抽象化させ、生徒の理解へと促した。具体的には、「イメージ読み」で使用した挿絵の部分が「つぶやき読み」の二回目では全て削除してあることから、挿絵のようにイメージで表せる内容が「具体」と呼ぶことを確認した。更に、一回目の方がつぶやきやすかったように、「具体」があるからこそ、文章の受け手に興味を持たせ、内容の理解を促し、会話が弾んだり、深まったりする、つまり受け手を感動させることができることを説明した。これらの説明により、生徒の感想に「『具体』とは何かが分かった」「納得」といった反応があった。「具体」に対するメタ認知化を行うこと

ができたのではないかと感じている。

(三) 使ってみる

「具体」とは何かが本当に分かっているかを確かめることを目的とし、次のステップとして実際に「具体」を使ってコラムを書いてみる活動を行った。

オリジナルの「具体」を考えて書いてみるのが目的であるため、その他の書くためのつまずきを取り払うべく、テーマの限定、テーマに関する知識、序論と結論のモデルを提示した。つまり、コラムのスタートとゴールを設定し、その間の過程を考えさせた。

テーマは、モデルとなるコラムが一月についての内容であることから、「自分の好きな月」とした。その月に関する習わしや知識などを参考に、それに関する具体例を書き足して文章を完成させることにした。字数は四百字程度とはしたが、字数を守ることは強制しなかった。序論となる第一段落に関しては、モデルをそのまま使用する生徒と、自分で考えて書く余力のある生徒とがいた。書く時にはほとんど助言をすることなく、教員側から手を加えることはしなかった。

書き終わると、稿者が原稿を「コラム新聞」として編集して発表会に備えた。同時に評価シートを準備した。評価シートで評価した項目は「(い) 具体例がイメージできる (ろ) 具体例がふさわしい (は) 納得できる」の三点を一から三点で点数を付けるようにした。各発表者が発表し終わるたびに評価シート記入時間を設け、その場で評価できるようにした。

補足として発表に備えて工夫したことを以下に列挙する。

- ①「コラム新聞」の編集
- ②スクリーンの利用
- ③発表順＋発表アドバイスのカード
- ④まとめプリント

①「コラム新聞」の編集

文字を書くことに様々な課題を抱えている生徒を配慮した工夫である。きれいに字が書けなかったり、うまく漢字が書けなかったり、筆圧が弱すぎたりと、生徒の直筆を載せるには少し配慮が必要なのが現状である。そこで、授業の目的の「具体」の理解に焦点を当て、自らの字に劣等感を与えて発表ができないということを防ぐため、全員のコラムをパソコンで打ち込むことで差を付けないようにした。また、新聞のように編集することで、生徒の意欲を引き出すよう視覚的な工夫を行った。

②スクリーンの利用

PowerPointを使っつけてはじめを視覚的につけるための工夫である。発表の時は各発表者の原稿のある場所を赤太枠で囲った画像を示し、コラム新聞の中のどの場所に目を向けるかを示すことで、発表時間であることを明示した。発表が終わると、「評価タイム」と映しだし、その後すぐに評価カードの書き方の説明の画像を映し出すことで、評価に集中できるよう促した。

③発表順＋発表アドバイスのカード

配布プリントにカードをセットにして配り、プリントを受け取った時点で順番が決まっているようにした。時間短縮と発表を盛り上

げる狙いがある。発表のアドバイスとしては、「大きな声」「ジェスチャー」「キメ顔」など、発表にミッションを課すことで、「えー！」という反応があると同時に、ゲームをしているような感覚で楽しく取り組めるよう空気づくりを行った。

④まとめプリント

他者評価と自己評価を載せるプリントである。他者評価とは、クラスの仲間による評価である。その評価カードを集めて貼るスペースを設け、評価カードが返ってきたらそれらをのり付けさせた。自己評価とは、他者評価を受けて自らのコラムを評価し、感想を記すことで、授業や本単元全体の振り返りとしても機能させた。

これらの工夫により、余計な指示で時間を取ったり混乱させたりすることなく、明るい雰囲気で発表を終えることができた。当日は新聞とテレビ取材として、生徒五人と教師一人に加え、新聞記者とテレビ局の取材者がカメラを持ち込み、また本校教員が複数名見学に来ており、生徒よりもその他の人数の方が教室を占めていた中で授業が行われた。そのような中でも、生徒が過剰な緊張がなく普段通り授業に楽しそうに参加でき、生徒自身が手応えを感じられる時間になることができたのではないかと思う。

六 生徒の作品の変化

本校では毎年五月頃に、定時制通信制の生徒対象の生活体験作文発表会向けの取り組みとして、生活体験作文を全生徒が書いている。つまり、今回取り上げた授業での取り組み以前に書いた作文と、

今回書いた作文の比較を通して、生徒の文章の変化を分析する。コラムと作文では異なる特徴があると思うが、これまで書いた文章の中で最も比較できるものとして作文を取り上げる。まずは、五月に書いた生徒Aの作文である。

「いじめ」

最近いじめに耐えられずに自殺をする人が多数います。いじめていた人はいじめていた人が自殺してしまつたらどんな気持ちになるのでしょうか？いじめていた人は絶対良い気持ちじゃないであろう。

僕も小学生の時いじめられていました。小3の頃T君が転校してきて、転校当日にT君と喧嘩をしてみました。喧嘩になった理由は、T君がちょっかいを出してきたので僕が後ろを向いたら手が顔面に当たって急いで謝つたけど許してくれずT君から突っかかってきたのでそこから喧嘩になった。友達が先生を呼びに行つて、先生が来て喧嘩は終わった。

でも僕の小学校生活が闇に包まれた。

翌日学校に行つたら、なぜか僕の土履きがなかったので先生に言つて探してもらいました。探していたら、トイレのごみ箱にありました。僕は誰がしたか分かつていたけど、先生に言わなかった。そのあと教室に入るとT君が後ろで笑っていたのでやっぱりT君が土履きを隠した事がすぐ分かった。でも僕は我慢して何も言わなかった。授業が終わる帰りとうするとT君が居て、僕はT君の隣を通つて下駄箱に行つて靴に履きかえて家

に帰った。家に帰つて親に今日あった事を言いたかつたけど、言えなかつた。言えなかつた自分に少し腹が立つてしまつた。

その日はお風呂に入り、ご飯を食べて寝ました。朝になつたので学校の準備をしてご飯を食べて学校に行きました。昨日の今日だから嫌な気持ちのまま学校に着いた。今日もまた土履きを隠されていないか心配して下駄箱に行つたけど下駄箱の中にちゃんと土履きがあつたのでホツとしました。教室に入るとT君が僕に「おはよう」と言ってきたので僕も「おはよう」と言いました。昨日は挨拶をしなかつたからちよつと気が悪かつた。昨日は遊び心でしたんだなとこの時は思っていた。4時間目が終わり昼休みになつたから、教室で読書をしていたらI君が話しかけてきた。I君とは話した事がなかつたのでちよつとびっくりした。I君は凄く優しくかつたから友達になつた。昼休みが終わる5時間目が始まつた。5時間目にT君が「ものさしがないから貸してくれん？」と聞いてきたからものさしを貸してあげた。ものさしを貸してT君が僕にもものさしを渡してきたけど、ものさしは折られて泣きそうになつたけど我慢した。5時間目が終わりI君が僕の所に来たからI君にもものさしの事を話した。I君は「遊びでやつたんだと思うから気にするな。」と言つてきた。僕は遊びでやつてないと思うけど遊びでやつたと思ひ込んだ。T君に「何で僕のものさしを折つたん？」とは聞けなかつた。聞いたなら何をされるかわからないからだ。嫌な気持ちで6時間目の授業を受けた。6時間目が終わり掃除の時間になつた。掃除が終わつたからI君と一緒に帰つた。いじめ

はなんと小3〜小5まで続いた。小5の2学期にT君とは仲良くなった。小5からずつと遊ぶようになった。この2年間くらい凄く嫌な気持ちだった。いじめは本当に嫌なものだと改めて思った。今はいじめられてないから凄く幸せだ。

生徒観でも述べたように、出来事をだらだらと時間に沿って羅列していると思つたら、急に話が展開し、その経緯も不明のまま、読み手が混乱したまま文章が終わっている。最初の問題提起「いじめていた人の気持ち」に関する結論は述べられず、「今はいじめがないから幸せだ」という飛躍した結論で文章が閉じられている。文章の受け手からすると何の話だったのか分からない文章である。これは、具体例に着目すると、具体例は書けているが、具体例の用い方に問題があると言えよう。何についての具体例が必要か。具体例から何を導き出そうとしているのか、文章のゴールを見据えて書かれておらず、思いつくままだからと書いていると考えられる。

一方次の文章は、今回の授業で同じく生徒Aによって書かれたコラムである。

年賀状をふと見返してみると、昨年の七五三の様子が写真として載せられているのがあった。十一月が遠い日のように感じる。▼十一月を「霜月」と呼ぶのは、「霜降月・霜降り月（しもふりつき）」の略とする説が有力とされる。▼十一月は私の誕生日だ。でも毎年誕生日プレゼントがないので少し寂しくなる。▼去年の十一月には事故に遭ってしまった。私が青信号で渡っ

ていたら、信号無視をした軽トラに横から突っ込まれてしまった。横から突っ込まれたので、手をつくことができずに尻もちをついてしまい、お尻がすごく痛かった。事故は去年の事故を合わせて二回になる。一回目の事故は回送バスと正面衝突で前歯が飛んでいった。二回の事故はとも嫌な思い出だ。▼私も今年で十九歳だ。今年の十一月は、事故に遭わないような年にした。

前出の作文との比較から見られる変化とその要因を四点に整理して挙げてみる。

一点目は、文章全体のまとまりである。序文は、稿者が提示した書き出しのモデルをそのまま使用しているので分析対象に入れないとしても、「十一月について」というテーマに沿ったまとまりのある文章が書けている。この要因としては、テーマの提示、モデルとしてのコラムの書き写し、結論を想定した具体例の引用が挙げられるだろう。

二点目には、書く際の作業の取りかかりのスムーズさである。Aは何かを書く際に、書き出しに戸惑い、何度も消しては書き直すことを繰り返して、何時間かかってもなかなか書けないということが毎回だった。しかし、今回は書き出しのモデルがあったことで、文章を書くことへの弊害が取り除けたのではないかと考えられる。

三点目は、具体例の適切さである。これまでだと時系列に思いつくまま書いていた具体例が、昨年十一月の二回の事故に焦点を絞られている。最後の「事故に遭わないような年にした。」とい

う結論に「ああ、だってあなたは昨年二回も事故にあったもんね」と文章の受け手が納得するような効果的な具体例が選択されている。これは、結論を想定した上で具体例を考えたこと、具体例の効果を学習した上でコラム作成に取り組んだことが要因と考えられるだろう。

最後は、文体の一致である。作文の時ほど注意していないにも関わらず、文体が一致している。コラムの書き写しをすることで、文体を一致させることに慣れてきたのであろう。

分析対象として載せたのは生徒A一名のみであるが、その他の生徒も同様の変化が見られた。

七 成果と意義

単元を通して率直に感じたのは、全ての生徒の文章力が、個人差はあるものの向上していたということである。欠席者が多く、生徒一人に一授業時間程度しか書く時間を与えられなかったにも関わらず、生徒が自力で書いたその文章は、どれもきちんと具体例が具体例として成立していた。この背景として次のことが考えられる。

まずは、モデルの提示である。月に一回程度のコラムの書き写しを行う中で、無意識のうちにコラムとはどのようなものかというモデルが形成されていたのではないかとと思われる。また、具体例以外の部分、つまり序論と結論のモデルを示すことによって、何もなしどころから書き始めるよりも、書くためのハードルが下がり、書きやすさを演出できたのではないかと考える。

次に、音読の工夫である。単に声に出して読むのではなく、今回は「具体」をイメージすること、そのイメージを論理的に理解することという二段階に分けた音読の工夫を行った。この活動から、「具体」の効果を体験的に、そして客観的に認識することができた。

最後に、発表会を行うことである。他の人に自らの文章が露見すると知った生徒は、人に見られることを意識した文章を心がけていた。「誰にも見られないのだからどうでもいい」ではなく、「なるほどな」「そうなんだ」と読み手（聞き手）を納得させる文章、つまり「具体」を効果的に使った論理的な文章へと導く結果になった。

これら三つの工夫により、具体例とは何か、今まで漠然とした認識が明確化されて生徒に内在することにより、前述した課題を解決する糸口になったと思う。

一方では、まだまだ課題はたくさんある。高校生でこれほどにまでレベルの低い学習をと非難されるかもしれない。論理的とは言ったものの、今回取り上げた具体は事実にとどまっている。また、抽象については何も触れておらず、コラムのある意味で何でも書けるという性格を都合良く利用したと見られても仕方のない実践である。コラムの本当のおもしろさや難しさを抜きにしているからである。よって、具体と抽象の認識をより高度なものにし、評論文と言える文章の読解に到達するには多くの実践の積み上げが必要と言わざるを得ない。

八 おわりに

この単元を行う際、目の前の生徒は何がどこまでできているのかを把握することに非常に戸惑いました。高校生向けの問題は不適切で、かといって高校以前では国語力をつけるためにはどのような段階があるのかという基準が私にはありませんでした。そこで、小学校からの学習指導要領や小学校での取り組み実践を参考にし、手探りで「読むこと」の能力が育成されるためのステップを自然と考えていました。そしてふと、大学院修士課程で「話すこと・聞くこと」に関して評価基準を一枚のシートで小学校から高校までチェックできるものを作成しようとしていたことを思い出しました。このように、一枚のシートで各能力を育成するためにはどのような成長のステップがあり、何ができれば目標達成したことになるのかが一目で分かるシートがあれば、どれだけ有難いかと感じました。これは稿者にとっての今後の大きな課題です。今回の実践を機に、少しずつ研究を進めて行ければと思っております。

参考引用文献

- 桂聖・考える音読の会『論理が身につく「考える音読」の授業 説
明 アイデア50』東洋館出版社（2011年2月17日）
- 桂聖・考える音読の会『論理が身につく「考える音読」の授業 文
学 アイデア50』東洋館出版社（2011年2月17日）
- 桂聖・授業のユニバーサルデザイン研究会沖縄支部『教材に「しか

け」をつくる国語授業10の方法 文学アイデア50』東洋館出版社
（2013年2月13日）

白石範孝『白石範孝の国語授業の教科書』東洋館出版社（2011
年12月26日）

山陽新聞コラム「滴一滴」（2014年1月6日）

岡山県NIE推進協議会主催「2013年夏季NIEセミナー」講

演資料（2013年8月23日）

日本NIE協会『情報読解力を育てるNIEハンドブック』（200
8年12月）

（岡山県高梁市立松山高등학교）

国語科（国語総合） 岡山県高梁市立松山高等学校 第2学年 平成25年2月14日（金） 第4校時（20:00～20:45） 教室 2年HR 授業者 川合萌		
題 材 （単元）	「具体」の効果を感じてみよう ～山陽新聞「滴一滴」のつぶやき読みをきっかけに～	
目 標	○自らの具体例をコラムに生かそうとしている（関心・意欲・態度） ○コラムの構成や内容を確認、具体例の用い方について評価できる（読むこと） ○具体例の効果を理解できる（知識・理解）	
指導上の立場	○生徒の実態 文章中の具体例の効果を理解しておらず、具体例を効果的に読みに生かすことができている。このため、読み取った内容を自分の頭の中でイメージすることが困難な生徒が多い。 ○題材（単元）観 大きな括りとしては評論文の読みの指導にあたる。中でも具体例の効果を理解することに重点を置く。身近で想像しやすい具体例を効果的に取り入れることで、読み手に書き手の主張をより理解し、納得してもらえるように工夫していることを理解し、その効果について評価できるようにする。 ○本題材（単元）で工夫する点や手だて 身近な内容で文章量も短く、生徒一人でも最後まで読み切ることができる新聞のコラムを教材として使用し、様々な音読の方法を通して声に出しながら学ぶことで、授業への参加を自らが認識できるよう工夫する。また、実際に具体例を用いてコラムを作成発表し評価し合うことで、具体例に対する理解を確認できるようにする。	
	主な学習活動	具体的な評価規準（◇）と評価方法
指導と評価の計画	第一次 コラムをイメージする…2時間 第1時 コラムの書き写し 第2時 挿絵の並べ替えと音読 第二次 具体の効果を知る …3時間 第1時 「つぶやき読み」① 第2時 「つぶやき読み」①の実践 第3時 具体に気づく「つぶやき読み」② 第三次 具体の活用 …4時間 第1時 テーマと構成を決める 第2時 コラムの作成 第3時 コラムと挿絵の完成 第4時 完成したコラムの鑑賞と評価 …本時	◇具体例の効果を理解できる（知識・理解）[ワークシート] ◇自らの具体例をコラムに生かそうとしている（関・意・態）[ワークシート・机間指導] ◇コラムの構成や内容を確認、具体例の用い方について評価できる（読むこと）[ワークシート]
全9時間		